

## 文 献 紹 介

群馬県立文書館 編：

『群馬県行政文書簿冊目録第4集 明治期地図編』

群馬県・群馬県教育委員会 1986年3月

B5判 227ページ

資料目録を本欄で紹介しようと考えたのは、資料自体の価値と本書の価値がともに大きいと判断したからである。本書は、群馬県立文書館が保管している検見耕地絵図・壬申地券発行にかかる地引絵図・村字限図・耕地整理図その他について地域別に分類し、検索のための整理番号を付した地図目録である。

内容の中心は明治5(1872)年・6年に作成された壬申地券発行にかかる地引図絵で、村ごとに作成された絵図1088点がリストになっている。試みに『旧高旧領取調帳』の村名により地引絵図が残存している割合を概観すると、3村のみで構成される片岡郡が100%となるのは例外としても、緑野・群馬・勢多各郡が約90%、多胡・吾妻・邑楽・新田・佐位・利根・碓氷各郡が80%以上の高率を示す。残存の割合がもっとも低い那波郡でも70%を上回っており、明治5・6年の景観を復原しうる大縮尺の資料がほぼ群馬県全域にわたって得られることを示している。

景観復原を目的とする利用に加え、地籍地図類の整備過程を追究する資料としても利用価値は高い。地引絵図等を含む広義の地籍図は、従来から多くの歴史地理学研究に利用されてきた。しかしながら、地籍図それ自体に関する研究は必ずしも多くなかった。1986年に佐藤基次郎が『明治期作成の地籍図』をまとめ、それによって地籍図研究のいわば「座標軸」が定められた。その後地籍図への関心が高まり、地引絵図の作成過程に関する考察<sup>1)</sup>や、作成経緯の異なる地籍図類の利用<sup>2)</sup>に従来以上に注意が払われるようになった。このような研究動向をふまえたとき、同一の作成経緯に基づく地籍図が広域にわたって得られるということは貴重であり、研究上意義深いといえよう。とくに壬申地券地引絵図は、地租改正地引絵図をはじめとする後の地籍図整備の起点となる図であり、その点からの意義も大きい。なお、壬申地券地引絵図は実測精度の点で後の地籍図類に及ばない面がある<sup>3)</sup>が、地番の導入ほか後の時代に

与えた影響もあり<sup>4)</sup>、資料としての重要性は十分に認められる。

さて、この地引絵図の性格を明らかにするための検討課題を若干述べておきたい。本書のリストには、地図名(村名)、作成年月日のほか、形状、採色数、戸長等氏名が記載されている。採色数は凡例の数<sup>5)</sup>とみてよいが、県央・県北と比べ邑楽郡・新田郡など県東部で種類が多い。また、文書館で実際の図面を見てゆくと、表現法が江戸時代の村絵図に近いものなども認められる。すなわち、同一の作成経緯に基づくにもかかわらず、仕上がった図は多様なものとなっているのである。一つの刺激に対する反応の多様さは、その反応に到達する過程がもつ特性を反映しているとみてよいであろう。この特性を明らかにすることが地引絵図の正確な理解のためには不可欠であると考えられる。同時に、この作業は明治初期における群馬県内の地域構造の一端を明らかにすることにもなるであろう。本書は膨大な量の地引絵図を背景に、興味深いヒントを利用者に与えてくれる。

〔注〕

- 1) 佐藤基次郎『明治期作成の地籍図』古今書院、1986、482頁。
- 2) 例えば、古田悦造「神奈川県相模原における地籍図(地引絵図)の作成過程」(葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー 上巻』地人書房、1988、226~247頁)がある。
- 3) 例えば、大羅陽一「土地宝典の作成経緯とその資料的有効性」(歴史地理学、137、1987、1~20頁)がある。
- 4) 前掲1)、36~40頁。
- 5) 前掲1)、42~49頁。
- 6) 凡例についての考察例として、古田悦造「愛知県における地籍編纂に伴う地籍図」(人文地理学会大会研究発表要旨、1986、68~69頁)がある。

(小口千明)